

何が好きかを尋ねてランキングにまとめる活動を通して、 身に付けた語句や表現を生かして相手に思いや考えを伝える学習

～3年「What do you like? 何が好き？」の実践を通して～

三 村 仁

I はじめに

次期学習指導要領において、外国語活動・外国語では、「実際に英語を使用して互いの気持ちを伝え合う」活動が「言語活動」として示されている。言語活動の目的や場面、状況等が明確になっているかどうかが授業づくりの大切なポイントである。

全体研究の3年次テーマ「子供が学びをつなぐ学習づくり」を受け、外国語活動・外国語の3年次研究テーマを「言語活動において、思いや考えを伝える英語の学習」と設定した。研究を通して、練習で身に付けた語句や表現をただ再生する学習ではなく、言語活動の相手や目的、場面等に応じて表現し、思いや考えを伝えることができる学習づくりを目指した。具体的には、練習と言語活動をつなぐための手立てや、思いや考えを伝えたい言語活動について研究を進めた。



思いや考えを伝える児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、言語活動において、思いや考えを伝える英語の学習を展開するための効果的な手立てを明らかにすることが目的である。そのために、以下の3つの視点から、授業実践「What do you like? 何が好き？」における児童の様子について分析する。

- ① 思いや考えの表出を促すWarming Upの工夫
- ② 相手や目的、場面等を明確にする言語活動の工夫
- ③ 伝わった嬉しさを実感する自己評価の在り方

なお、研究の対象とした単元の概要は以下のとおりである。

1 単元名 「What do you like? 何が好き？」(4時間)

2 単元の目標

「好きな○○ランキング」をまとめる活動を通して、何が好きかを尋ねたり答えたりする表現を身に付け、積極的に友達と尋ね合おうとする。

3 単元の概要

本単元では、「What ~ do you like?」などの何が好きかを尋ねたり答えたりする表現や、スポーツや飲食物等に関する語句を身に付け、積極的に友達と尋ね合おうとすることをねらいとした。

本時においては、「好きな○○ランキング」をまとめる活動を通して、何が好きかを尋ねたり答えたりする表現を使って、友達と積極的にコミュニケーションを図ることをねらいとした。そのために、単元で扱う語句に触れる機会を増やすとともに、雰囲気を含め、言語活動において思いや考えを表出しやすくなるWarming Upを設定した。また、言語活動に対する必要感を高めたり、より自然なやり取りとなるような表現を使うように促したりして、相手や目的、場所等を明確にする言語活動となるよう工夫した。

Ⅲ 結果と考察

1 思いや考えの表出を促すWarming Upの工夫

(1) 結果

本実践では、児童が話したいと思えるような雰囲気づくりを目指し、Warming Upの工夫をした。具体的には、次の2つの手立てを講じた。

1つめの手立ては、本単元で扱う食べ物についての語句を使って好きかどうかを尋ねる活動を「Small Talk」として設定したことである。本単元では前単元の既出内容を扱うことが多い。前単元とのつながりのある内容を扱うことにより、児童に安心感を与えたり、単元を貫く意識を与えたり、単元で扱う語句等の技能を向上させたりすることができると考えた。単元における児童の様子を踏まえ、より自然なやり取りとなるように、HRTとJTEで以下のようにデモンストレーションを行った（写真1）。

HRT 「Today, is very hot. I want to eat ice cream. I have a question. Do you like ice cream?」

JTE 「Yes, I do. I like ice cream. How about you?」

HRT 「Oh! Me, too. I like ice cream, too. What flavor do you like?」

JTE 「I like strawberry ice cream. How about you? What flavor do you like?」

HRT 「I like chocolate ice cream.」

HRTとJTEが、既出内容を取り入れたデモンストレーションを行うことによって、児童は場面や状況を理解し、これまで身に付けてきた語句や表現を活用しながら「Small Talk」を行っていた。相手と視線を合わせる「アイコンタクト」を意識して会話したり、“What flavor”の部分強調して（「クリアボイス」）会話するなど、コミュニケーションのポイントを意識しながら、楽しそうに自信をもって会話している姿が見られた。ただし、中には、“What flavor do you like?”に対して、“Yes, I do. / No, I don't.”と答える児童がいるなど、“Do you like ~?”に対するやり取りと混同している姿も見られた。

2つめの手立ては、「Foods Jingle」（「Let's try! 1」デジタル教材）を歌う活動を設定したことである。その理由は、前単元や短時間学習（週1回15分間）で繰り返し「Foods Jingle」を扱っており、児童が安心して歌うことができるとともに、食べ物に関する多くの語句に慣れ親しむことができるからである。本実践では、活動の質を高めるために、発音が難しい“l”と“r”について確認する場面を設定した。JTEの口の形に注目させて発音させたり、「lemon」や「strawberry」などの“l”と“r”が入っている語句を用いて簡単に練習する場を設けたりした後に「Foods Jingle」を再生した。活動の質を高める場面を設定することで、単に雰囲気を温めるだけではなく、ネイティブな発音に近付けようとする児童の姿が多く見られた。



写真1 JTEとのデモンストレーション

(2) 考察

「Small Talk」では、児童が話したいと思える場面や状況の設定を工夫してきた（HRTが週末に行ったラーメン屋の話から食べ物の話につなげる、HRTが見たスポーツニュースからスポーツの話につなげる、など）。こうした工夫や、HRTとJTEによるデモンストレーションを行ってから児童同士で会話させることにより、児童は既出内容を用いて安心してコミュニケーションできるようになっていることが分かった。

「Foods Jingle」等の歌う活動は、歌うこと自体が雰囲気を温めることは言うまでもないが、繰り返すうちに単調となる懸念もある。今回のように、プラスアルファの要素を取り入れることは、児童にとって過度の負担にならずに発音の質を向上させる効果があるとともに、音声を十分に聞かせる必要がある発達段階では大切な取組であると考えられる。

2 相手や目的、場所等を明確にする言語活動の工夫

(1) 結果

本時は、単元のゴールである「好きな〇〇ランキング」をまとめる時間であり、そのために“What

～ do you like?』の表現を使って互いに何が好きかを尋ねたり答えたりする場面を設定した。本実践について、以下の3つの視点から結果を述べる。

1つめは、やり取りについてである。単元のゴールである「好きな○○ランキング」にまとめることは、単元の第1時に示した。HRTとJTEによるデモンストレーションを見せ、HRTが実際に本校の職員に尋ねた結果をランキングにして提示したことにより、「自分たちの学級ではどのようなになるのか。」「早くやってみたい。」などと意欲を高めるとともに、第2時、第3時と目的意識をもちながら語句や表現を身に付けることができた。また、単元では、スポーツ、食べ物（料理が中心）、果物、色、動物の5つのジャンルを扱い、やり取りを意欲的に進めることができるよう、グループ内でジャンルを選択・分担して取り組んだ。また、より自然なやり取りとなるよう、既習の簡単な挨拶から会話を始めたり、「I have a question.」と前置きを入れたりしながらやり取りを進めることとした。この表現は、本時で初めて扱うこととなったが、「Small Talk」でHRTやJTEが使っていたことを想起させ、若干の練習時間をとることにより、実際に使ったり、使おうとしたりする児童の姿が見られた。

2つめは、ワークシートの扱い方についてである。やり取りの際、相手に答えてもらった情報を記録するために、ワークシートを使用した。しかし、記録することに意識が向き、やり取りが円滑に進められていない状況が見受けられた。一旦活動を中断し、やり取り後に記録するように指示をしたことで、やり取りが円滑に進むようになった。

3つめは、即時的なフィードバックについてである。相手や目的、場面等を明確にした言語活動では、これまでに身に付けた語句や表現を生かし、思いや考えを伝えていることが大切である。このような姿を発揮している児童を見取り、動画で記録したものを、活動の途中で即時に全員に向けて見せた。コミュニケーションのポイントを意識しているかどうか、身に付けた表現を使ってやり取りしているかどうかなどをフィードバックした上でやり取りを再開した。再開後は、使うべき表現に気を付けながらやり取りしたり、コミュニケーションのポイントをより意識して取り組んだりする児童の姿が見られた。



写真2 動画を使用したフィードバック

(2) 考察

1つめのグループ内でジャンルを選択・分担することについては、やり取り後に自分が得た情報をグループ内で共有することになるため、言語活動に対する必要感を高めることにつながったと考える。

2つめのワークシートについては、集めた情報を記録するためには、今回のようにワークシートをツールとして使用する必要がある。しかし、記録することが目的になってしまうと、本来の言語活動とならないこともある。自分の思いと相手の思いを比較しながら相手の答えを聞いたり、その答えに対する反応を示したりするなど、相手の相手を意識したコミュニケーションとなるようにツールを使用する必要がある。

3つめの動画を活用したフィードバックについては、モデルとなるやり取りを即時に見たり、表現を正しく使っているかどうかを確認したりできる点や、その後の活動で即時に生かすことができる点において、効果的であると考え。このようなフィードバックを言語活動において繰り返し設定することにより、相手や目的、場面等をより明確にし、言語活動の質を高められると考える。

最後に、これらの成果につながる支えとなったのが、単元導入時のゴールの示し方である。活動の目的が明確であることは、学習計画を見通し、語句や表現を身に付ける必要感や会話の相手への意識をもちながら取り組むことができるという点で効果的であると考え。

3 伝わった嬉しさを実感する自己評価の在り方

(1) 結果

本時は、単元の最後の時間なので、振り返りの視点を「今回の学習でできるようになったこと」や「友達とのやり取りをしてみて、分かったことや気が付いたこと」と設定した。以下、実際の記述である（資料1、資料2）。

Today's goal (A)・(B)・(C)・(D)	何がすきかたすねてうまかにまとめよう。
できたこと	3年2組のランキングで「いいいなもの」
次ががんばること	か「いいでびっくりした。こんどはも
コミュニケーションの 楽しさ など	と多くの人とがいわしてみたい。

資料1 児童Aの振り返りカード

Today's goal (A)・(B)・(C)・(D)	何がすきかたおね右ってランキング
できたこと	さんちゅうしてたけと一回目より
次ががんばること	もっとできるううになつてとて
コミュニケーションの 楽しさ など	楽しかったです。

資料2 児童Bの振り返りカード

(2) 考察

児童AやBは、単元前半の語句や表現を身に付ける段階では自信がもてず、はっきりと伝えることを目標に取り組んできた。本時では楽しくやり取りする様子が見られるとともに、意欲を高めたことやできるようになった嬉しさを記述している。児童Aについては、「すきな○○ランキング」の内容にも触れ、ランキングにまとめた結果（資料3）から感じた意外性を記述していた。本時では十分に扱えなかったが、こうした記述を取り上げて全体で振り返ることにより、自分の思いや考えを深めることにつなげることができたのではないかと考える。

すきな	ランキング
Color	1 グループ
Top 1	きいろ 3 point
Top 2	黒赤、みり 2 point
Top 3	青、白 1 point

すきな	ランキング
Sports	6 グループ
Top 1	Soccer 5 point
Top 2	Swimming 2 point
Top 3	BASE BALL 1 point DODGE BALL

資料3 児童が作成したランキング表

IV まとめ

本研究の目的は、「思いや考えの表出を促すWarming Upの工夫」「相手や目的、場所等を明確にする言語活動の工夫」「伝わった嬉しさを実感する自己評価の在り方」という3つの視点による指導が、言語活動の相手や目的、場面等に応じて表現し、思いや考えを伝えることができる学習づくりに効果的であったかを確認することである。本研究における成果と課題は、次のとおりである。

1 成果

- 「Small Talk」において、児童が話したいと思える場面や状況を設定し、デモンストレーションを通して理解させることにより、「Small Talk」の質を高め、児童が安心してコミュニケーションすることができた。
- 「Foods Jingle」等の歌う活動に、発音の質を向上させるなどのプラスアルファの要素を取り入れることにより、更に効果的な活動とすることができた。
- 単元導入時において、ゴールを魅力的に示すことにより、児童に言語活動の相手や目的、場面等を理解させたり、学習意欲を持続させながら語句や表現を身に付けさせたりすることができた。
- 視点を明確にして振り返りカードを記述することにより、単元全体の成長を児童自身が実感することにつながった。

2 課題

- より充実した言語活動とするために、「Small Talk」の質を高め、指導計画に適切に位置付けていく必要がある。
- 言語活動と途中のフィードバックを効果的に行い、トライアンドエラーを繰り返しながら学習の質を高めていけるような時間配分について、単元および1単位時間内で構想する必要がある。
- 児童が自分の思いや考えを深めることができるような自己評価の活用方法について、実践を積み重ねていく必要がある。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 文部科学省 開隆堂 平成29年7月
- 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 文部科学省 平成29年6月
- 初等教育資料No.974「移行期間中における外国語活動の授業づくりのポイント」
文部科学省 東洋館出版社 平成30年12月
- 平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 国語 大城 賢 編著
東洋館出版社 平成29年10月
- Q&A小学英語指導法事典 教師の質問112に答える
樋口忠彦・高橋一幸・加賀田哲也・泉 恵美子 編著 教育出版 平成29年10月